

拗音の表の成立過程

内田 智子

人間社会学部 国際観光学科

The Process of Completing “*Yo-on no Hyō*”

Tomoko UCHIDA

Dept. of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies

Abstract: At present, the sounds such as “*kya, kyu, kyo*” “*sha, shu, sho*” are called “*yo-on*”, and it is recognized as a concept against “*choku-on*”, the sounds such as “*ka, ki, ku, ke, ko*” “*sa, shi, su, se, so*”. Even in the Edo era, the sounds of “*ka, ki, ku, ke, ko*” “*sa, shi, su, se, so*” were recognized as “*choku-on*”, and the sounds of “*kya, kyu, kyo*” “*sha, shu, sho*” as “*yo-on*”. So it seems that this recognition in the Edo era has been inherited to the present days. However, there is a big difference between the concept of the “*yo-on*” in the Edo era and that of the “*yo-on*” at present.

“*Yo-on*”, which played a supplementary role in explaining kanji sounds in the Edo era, got more analytical explanation and the independent position in the Japanese sound system in the Meiji era. That was based on the introduction of the alphabet, the concept of “consonant”, and the western phonetics. As a result, “*Yo-on no Hyō*” has been completed.

Keywords: “*Yo-on no Hyō*”, *Choku-on*, alphabet, sound analysis

要旨：現代において、「キャ・キュ・キョ」「シャ・シュ・ショ」等の音は、「拗音」と称され、「カキクケコ」「サシスセソ」等の「直音」に対する概念として認識されている。近世においても、「カキクケコ」「サシスセソ」等は「直音」、「キャ・キュ・キョ」「シャ・シュ・ショ」等は「拗音」と称され、表面的にはこの認識が現代まで継承されているように見える。しかし、近世の「拗音」と現代の「拗音」は、概念自体に大きな違いがある。

近世に「漢字音」と密接に結びついていた「拗音」は、「子音」の概念の獲得、アルファベットの導入、西洋音声学の概念の導入によって、独立した地位を与えられ、より分析的な説明がなされるようになっていく。その結果として、「拗音の表」が完成した。

キーワード：拗音、直音、アルファベット、音声分析

1 問題の所在

「キャ・キュ・キョ」「シャ・シュ・ショ」等の音は、一般的に「拗音」と称されている。日本の小学生も、日本語を学ぶ外国人も、「日本語の音」として、「五十音図」や「濁音の表」とともに「拗音の表」を学ぶ。従来の研究では、拗音の表が初めて国語の教科書に登場したのは、昭和8年1月発行『小学国語読本尋常科用』だとされているが、その成立過程については、明らかにされていない。また、近世の「拗音」と近代の「拗音」とは

概念自体が異なるように思われるが、従来、その差異にも言及されていない。

2 近代以前の「拗音」

現代において、「拗音」は、「直音」に対する概念とされている。近世においても、「カキクケコ」等は「直音」、「キャ・キュ・キョ」等は「拗音」と称され、表面的にはこの認識が現代まで継承されているように見える。近世に流布した「直音拗音図」という図がある。この図は、五十音図の各文字の下に、その行の「イ段仮名＋ヤ行仮名」、「ウ段仮名＋ワ行仮名」が付されている。大きい文字が「直音」、小さい文字が「拗音」と呼ばれており、機械的に音図上に配置しただけのもののように見える。これは中国の反切の手法の応用であることが指摘されている。当時、拗音は日常生活の中において、漢語、方言、俗語の中で実際に使用されているが、拗音は直音がねじ曲がった「異国の不雅の音」とされ、あくまで直音の付属物的扱いであった。近世は国学の全盛期であり、異国の音である拗音は憎むべき音として、それ自体が研究対象となることはなかった。

3 拗音のみをまとめた表の成立

明治 10 年代後半から、拗音に対する認識が徐々に変化し、「実際に使用する拗音」を「組織的に整理する」試みが始まる。これは、一次的には、開国後の大量の外来語の流入により、拗音の存在を無視できなくなったこと、音素文字の導入によって拗音を分析的に表記できるようになったことによると推測される。

早いところでは、ローマ字論者である南部義壽『よこもじほんてびきぐさ』（1872／明治 5）にその萌芽が見られ、羅馬字会が発表した「Rōmaji nite Nihongo no kakikata」（1885／明治 18）で、拗音のみの表が完成する。同じ時期に、「速記法」の分野でも動きが起きる。1882 年（明治 15）、西洋文化の一つとして「速記」が紹介され、速記文字による「拗音」の表記法が考案され、拗音のみをまとめた表ができる。ローマ字論も速記も、聞き取った音を写す「写音」が最重要課題であり、実際に使用される拗音を書き写すためのマニュアルが必要であった。ここにおいて、文字はローマ字や速記文字であるが、拗音のみの表が完成した。

4 国語文典における拗音の表の成立とその後の展開

国語文典において、現代の拗音の表に近い形の表が現れるのは、大槻文彦『語法指南』（1889／明治 22）あたりからだと思われる。まず、明治 10 年頃から、近世の直音拗音図の中から「拗音」のみを取り出して表にしたものが現れ始める。その後、その中から実際に使用する音のみを抽出する試みがなされ、明治 20 年代後半から、多くの国語文典に現代と同様の「拗音の表」が掲載されるようになる。独立した音として組織的に扱われることで、国語文典の中で拗音の地位が確立したのがこの頃である。

それと時を同じくして、「拗音とはどのような音か」が議論されるようになっていく。従来直音とされてきた「シ」や「チ」の音は、アルファベットの導入により、拗音性が提起され、「直音・拗音」の概念自体に疑問が呈されるようになるが、「口蓋化」の概念や「音韻論」の導入により、対立軸は残され、現代に至る。